

アート

と

地域

のための

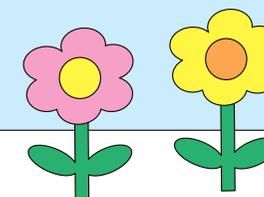
スモールトーク・

プロジェクト

さまざまな人が芸術文化  
に触れる場をひらいていく  
アートコーディネーターの  
活動に興味のある方へ



私の／あなたの／みんなの  
アートの土壌を一緒に耕しませんか



## 目次

アートと地域のためのスモールトーク・プロジェクトとは ……	02
①旧大津公会堂プロジェクト ……	04
②愛荘町立ハーティーセンター秦荘プロジェクト ……	08
地域とつくる文化事業のためのヒント ……	12
寄稿 ……	16

## 理事長あいさつ

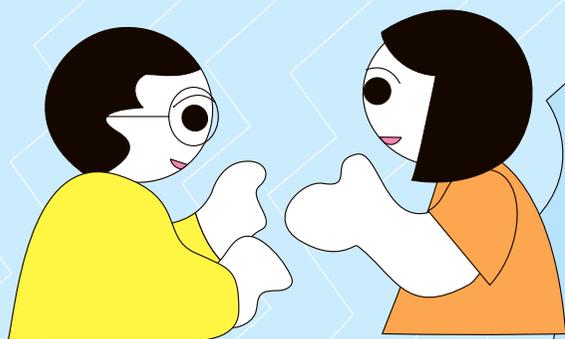
日ごろは、公益財団法人びわ湖芸術文化財団 地域創造部の活動に変わらぬご理解、ご協力をいただき、心より感謝申し上げます。私たちは、令和8年度より「びわ湖芸術文化交流センター Biwako Arts & Communication Center / BiWACC(ビワック)」の愛称で活動を行うことになりました。県内の多様な才能と地域資源を結集し、新しい価値や芸術を生み出すことを目指し、文化ホールやアートNPO、アーティストなどと協働で事業に取り組みます。

それに先がけ、「アートと地域のためのスモールトーク・プロジェクト」では、アートコーディネーター(アートと地域のつなぎ手)と地域の文化ホールの連携・協働をテーマに事業を行いました。文化ホールが地域コミュニティの拠点となり、より多様な人に開かれる場所になるには、地域人材との連携を強めていくことが必要だと考えています。

また、当事業が県内アートコーディネーターの支援・人材育成の一助となり、県内文化芸術活動者の方を応援するものとなるよう、事業の成果を本冊子にまとめましたので、ぜひご覧いただき、ご意見、ご感想などお寄せいただければ幸いです。今後も変わらぬご理解、ご協力を賜りますようお願いいたします。

公益財団法人びわ湖芸術文化財団  
理事長 村田和彦

# アートと地域のための スモールトーク・プロジェクトとは



**「スモールトーク」とは？**  
人と人が気軽に言葉を交わし、関係や気づきを育てるための対話を指す言葉。



劇場・文化ホールは地域コミュニティの拠点となる場所です。「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」には、劇場の目的の一つとして「地域社会の絆を維持、強化すること」、「共生社会の実現に資する」ことが挙げられています。

人口減少やコロナ禍により地域のつながりが希薄になる中、劇場・文化ホールは、単に上演を見に行くための場所ではなく、人が集い、文化的な

いとなみを共有し合う場所となることが期待されています。

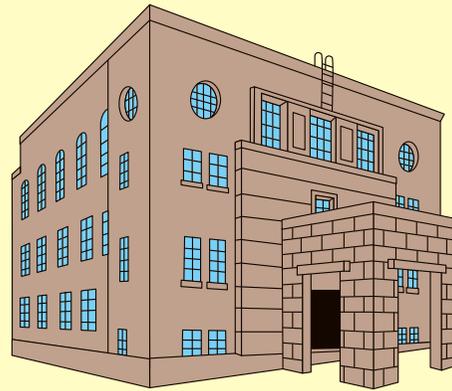
本事業では、アートコーディネーター（アートと地域のつなぎ手）と地域の文化ホールが連携・協働することで、文化ホールにより多様な人々に関わることを目指しています。令和6年度・7年度の2年に渡り、旧大津公会堂と愛荘町立ハーティーセンター秦荘を拠点に実施されました。

## 実施スケジュール

	旧大津公会堂	愛荘町立ハーティーセンター秦荘
令和6年 (2024年) 6月頃まで	文化ホール担当者とミーティング 企画を考えるアートコーディネーターと取り組むテーマの決定	
	<b>テーマ</b> 大津地域で表現活動をしている人たちが、もっとまちなかに表現活動を広げるには？ 企画者：長砂伸也・中川佑希 (旧大津公会堂・NPO法人 BRAH=art.)	<b>テーマ</b> 外国人住民にもっと文化ホールを楽しんでもらうには？ 企画者：柳田リープス安代 (Office Reives・MEET BY CHANCE 代表)
12月	<b>キックオフイベント</b> 「アートと地域のためのスモールトーク・プロジェクト」クリスマスパーティー 開催日：12月25日 会場：滋賀県立芸術劇場 びわ湖ホール 研修室	
令和7年 (2025年) 3月まで	<b>トーク&amp;ワークショップ</b> 「まちで、自由にオドルには!? ~アートで大津の日常を彩る~」 開催日：3月20日 ファシリテーター：池田佳穂(インディペンデントキュレーター) ゲスト：若林かをり(フルート奏者) 藤川結(丸屋町商店街 ギャラリーQ) 石川亮(成安造形大学教授、近江学研究所研究員) 司会：金度源(立命館大学准教授、都市地域デザイン研究室) → P.05	<b>アンケート</b> ブラジル人住民への文化ホールへのニーズ調査を実施 → P.09  <b>ホールツアー</b> 英語話者の外国人住民を集め実施 → P.09
4月から	<b>レクチャー&amp;まち歩き</b> 「浜大津アートさんぽ」シリーズ 開催日：7月5日、9月12日 講師：池田佳穂 → P.06	<b>ゲーム会</b> 世界のゲームで遊ぼう！ 「WORLD GAME PARK」 開催日：毎月1回土曜日 → P.10
7月	<b>報告会&amp;レクチャー</b> 「アートでなにかはじめてみよう」 開催日：7月27日 講師：若林朋子(プロジェクト・コーディネーター) 会場：滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 研修室+オンライン配信	
12月	<b>まちなかでのアート</b> 「みせなか ART EXHIBITION」 開催日：12月4日-21日 → P.06  <b>トーク</b> 「アートで大津の日常を彩る~ローカルアートコーディネーターを広げるには~」 開催日：12月14日 ゲスト：石川亮(成安造形大学教授、近江学研究所研究員) 池田佳穂(インディペンデントキュレーター) → P.06	<b>コンサート</b> 「WORLD GAME PARK Presents わくわくコンサート」 開催日：12月6日 出演：脇阪法子(ソプラノ) 榎山さやか(ピアノ) JUNBOKU → P.10



# 1 旧大津公会堂 プロジェクト



NPO法人BRAH=art.が運営する旧大津公会堂では、3月に開催したトーク&ワークショップをきっかけに、アートと地域の日常をつなぐさまざまなプログラムが生まれました。表現する人、見る人、場が出会い、まちなかにアートが広がる可能性を探りました。

## 日常のなかに アートを取り戻す実践

岩原勇氣  
(NPO法人BRAH=art. 理事長)

NPO法人BRAH=art.(以下、ブラファート)は、障がい者の支援団体として2014年から活動を続けてきた。「障がいがあるとなかろうと、好きなことを仕事にして精一杯生きる」をテーマに、障がいのある人が支援される側ではなく、まちを支援する側になろうと、常に社会との接点を意識した活動を展開してきた。

2023年から指定管理者として旧大津公会堂の運営をはじめ、この地域のアート活動・表現活動に対して感じていることは、何かを作ったり、ダンスをしたりする人は多い一方で、それらが目に触れる機会が少ないという点である。

また、当館の利用者から「他にどこか発表できる場所はないですか」「参加してくれる人はいませんか」と尋ねられることが多い。市内には公立施設や造形大学があるものの、音楽スタジオやライブハウス、アトリエやギャラリーといった、生まれ育つ場が少ない。京都や大阪と比べ、日常生活で「アート」を感じる瞬間が明らかに少ないと感じている。

さらに2024年からは滋賀県立美術館の夏祭り企画に携わり、美術館の魅力をより多くの県民に伝えるための取り組みを行ってきた。祭りの前段として近隣の福祉施設や保育園でワークショップを実施し、作品を館内に展示するなど、美術館に親しみ、楽しみ方を深める企画を行った。自身の生活環境と展示作品が地続きであること、敷居の高いイメージを持たれがちな美術館と自分との境界をにじませることを目指したのである。法人の活動、旧大津公会堂の運営、美術館での取り組みを通じて出会う人々は実に多様で、それぞれが魅力的である。住民一人ひとりの個性が見えてくるような取り組みを行いたいと考えている。



旧大津公会堂「談話室・座」。作品展に加えて「服の交換所」「本の交換所」も設置(「スモールトーク・プロジェクト」以外の活動)



滋賀県立美術館「みんなでつくる!みんなで楽しむ!美術館の夏祭り!」にて、ワークショップを開催(「スモールトーク・プロジェクト」以外の活動)

## 「まちで、自由にオドルには!? ～アートで大津の日常を彩る～」を振り返って

眞島美帆子(公益財団法人びわ湖芸術文化財団地域創造部 事業担当)



第1部ゲストトークの様子

3月に開催したトークとワークショップを組み合わせ「まちで、自由にオドルには!～アートで大津の日常を彩る～」。

前半のトークでは、まずみんなで「アートってなんだろう?」という話をしました。アートと言うと、なんだか高尚で、自分とは関係ないものに思う人が多いかもしれません。ですが、成安造形大学の石川亮先生は、「SNSの普及により、誰もが自分の考えを編集・発信できる時代になった。これは、むしろ、昔よりもアートが身近になった、ということではないか」と口火を切りました。そして、石川先生が普段行っている、まちの中の「なぜか気になる」場所を撮影し、皆で写真を見ながら語り合う実践について紹介いただきながら、「まずは肩肘張らずに、アートの“一歩手前の感覚”をアウトプットすることが大切なのではないか」という提案がありました。撮影者の「なぜか気になる」の感性がアウトプットされ、「客体化」され、他者と対話がなされることで、社会とのつながりが見えてきて、それがアートになり、作品になるかもしれない。石川先生は、そんな手ごたえを感じていると言います。

フルート奏者の若林かをりさんは、「音楽についても、どこから音楽でどこからそうじゃないと感じるのは、人によって異なる。日常的なもの/非日常的なもの、それぞれが入り混じり、それぞれにアートがあると良い」と言いました。そして、「お勉強」ではない形で、まちのなかでアートに触れ、それがつくられた理由を考える機会があると、発見があって良いよね、と。

そこから、ギャラリーQの藤川結さんも交え、様々な人が行きかい、色々なジャンルが出会い影響を受け合う、物理的な「場」の重要性について話をしました。立命館大学の金度源先生からは「まちとしての感受性」を上げていき



第2部ワークショップの様子

たいと、ひとつのキーワードが飛び出しました。「滋賀県は自然の音がたくさん聞こえる」と若林さんが言い、石川先生は「まちの情報が多い都市よりも、一見、なにもないところのほうが“たくさん感じる”ということもある」と言いました。大津のまちの感受性は、どんな感受性なのでしょう。

第2部のワークショップのファシリテーションを務めた池田佳穂さんは、作品鑑賞の子ども向けプログラムを行う際に「どんなときにあなたの心の鈴が鳴ったの?」と質問するといいます。ワークショップでは、参加者同士で「①あなたの心に響くアートや表現とは?」「②日常の中で①と出会うためには?他者と共有するためには?」という二点について語り合いました。参加者からは、「自分がどういうアートが好きで、どう共有したいかはっきりしました。そういうことを考える人が増えることで、まちの感受性が育っていくのだと思いました」などの意見があり、前向きに「大津のまちの感受性」を考える場がはじまったように思いました。

トーク & ワークショップ  
「まちで、自由にオドルには!?  
～アートで大津の日常を彩る～」  
開催日:2025年3月20日(木・祝) 9:30-12:00

第1部 ゲストトーク「アートと文化と地域」  
ゲスト:若林かをり、藤川結、石川亮 司会:金度源

第2部 ワークショップ「アートで日常を彩るには」  
ファシリテーター:池田佳穂

# アートを活用した地域コミュニケーションの創出 —旧大津公会堂の実践

長砂伸也(NPO法人BRAH=art.)



7月開催のワークショップ「アートの見かたを学ぼう!」浜大津周辺を散策

## 「浜大津アートさんぽ」シリーズ

講師:池田佳穂 司会進行:長砂伸也

①「アートの見かたを学ぼう!」

開催日:2025年7月5日(土) 14:00-17:00

②「アートの魅せ方を学ぼう!」

開催日:2025年9月12日(金) 19:00-21:00

## 「みせなか ART EXHIBITION」

開催日:2025年12月4日(木)-12月21日(日)

会場:MATSUBARA COFFEE、Patisserie Lumiere、  
濱崎銃砲火薬店、Oi Coffee

参加作家:Jun, Yukari Blair, Sayu, 片倉洋一、ソルト(msolt)

会期中トークイベント

「アートで大津の日常を彩る ~ローカル  
アートコーディネーターを広げるには~」

開催日:2025年12月14日(日) 16:00-17:30

ゲスト:石川亮、池田佳穂

旧大津公会堂では、キックオフイベント「まちで自由にオドルには!? ~アートで日常を彩る~」での対話を通じて、「大津地域では表現活動をしている人は多いが発表の場が限られている」という声が多く聞かれた。また、「アートと聞くとハードルが高く感じる」との声も多くあった。これらの課題を踏まえ、表現活動をしている人と場所をつなぐ実践を行うこととなった。実施したのは、アートを身近に感じるためのワークショップ(7月・9月)と、アート作品を旧大津公会堂周辺の店舗に展示する企画だ。あわせて、旧大津公会堂スタッフの中川・長砂がローカルアートコーディネーターとしてのスキルを身につけることも目的とした。

7月の「アートの見かたを学ぼう!」では、インディペンデントキュレーターの池田佳穂氏によるミニレクチャーを通じて、アート鑑賞の視点や、まちを観察する際のコツを学んだ。考現学<sup>\*1</sup>やトマソン<sup>\*2</sup>といった概念を手がかりに、普段見過ごしている風景や違和感に目を向けることで、まちそのものが鑑賞の対象になり得ることが示された。まち歩きでは浜大津エリアのアート作品を鑑賞し、作品と周辺空間が一体となった体験を通して、参加者それぞれの気づきを

を共有した。ギャラリーQでは、日常の中で心が動いた瞬間を切り取った写真を展示し、撮影者の気持ちを想像しながら感想を交わした。身近な行為が対話のきっかけになることを実感する場となった。

9月の「アートの魅せかたを学ぼう!」では、鑑賞者の視点から一歩進み、作品の魅力をどのように伝えるかというキュレーションの視点を学んだ。5つの現代アート作品を題材に、背景やスケールを踏まえ、どのような空間に置かれると魅力が伝わるかを考えた。後半は夜の浜大津エリアを歩き、チームごとに担当作品を決めて展示場所を探した。昼間とは異なる街の表情に目を向けることで、日常空間に潜む展示の可能性を読み解く機会となった。

12月には「みせなか ART EXHIBITION」を開催し、旧大津公会堂内で行ってきた展示を、まちなかの店舗へと広げた。作品を公募し、店舗と作品のマッチングを行うことで、暮らしの場にアートを置いた際にどのような会話や体験が生まれるのかを試みた。

本プロジェクトを通じて、アートは専門的に語られる対象である以前に、感じたことを言葉にし、誰かと共有するための媒介になり得ることが確認できた。小さな気づきや感想を交わすスマートークの積み重ねが、地域における新たな関係性や視点を育む可能性を示した点は、大きな成果である。今後は、こうした学びと実践を継続的な取り組みへと発展させ、地域に根ざしたアートの関わり方をさらに探っていききたい。

\*1 1920年代に今和次郎が提唱した、都市生活を観察・記録する方法。

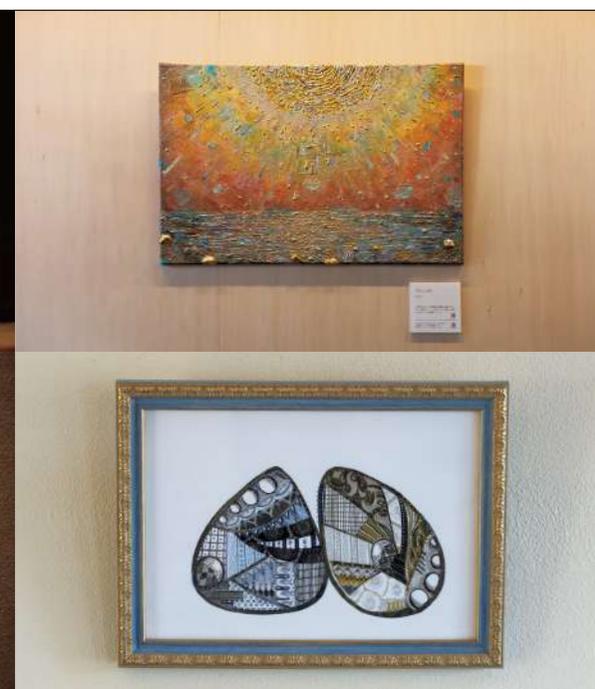
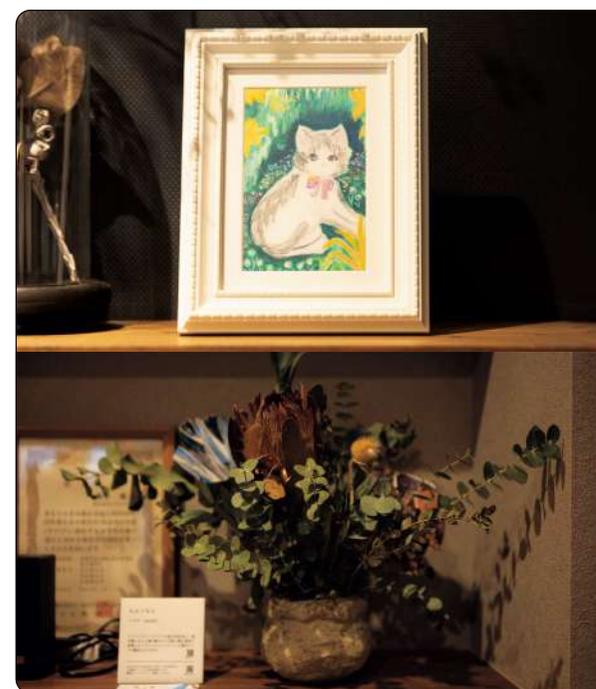
\*2 赤瀬川原平が命名した、機能を失いながら残存する都市構造物の呼称。



9月開催のワークショップ「アートの魅せかたを学ぼう!」



12月開催の企画展「みせなか ART EXHIBITION」トーク



「みせなか ART EXHIBITION」では作品を公募し、店舗とのマッチングを行った。各展示の様子

2

# 愛荘町立ハーティーセンター秦荘 プロジェクト



開館30周年を迎えるハーティーセンターは、若い世代や外国人住民など多様な人が関わる文化ホールを目指し、新たな取り組みを重ねています。その実践から生まれた交流のかたちを紹介します。

## だれもが使いやすい場所へ、 多文化・多世代にひらく ハーティーセンター

林定信 (一般社団法人愛荘町文化協会事務局長)

愛荘町立ハーティーセンター秦荘(以下、ハーティーセンター)は、2025年に開館30周年を迎えます。そこで3年前、2022年に外部の有識者からなるハーティーセンター魅力増進計画策定委員会を設けて、これからのハーティーセンターの目指すべき方向性について提言いただきました。それまで利用が少なかった若い世代、小中学生などの利用を増やすことも早急に取り組むべき課題とされました。2022年度から演劇鑑賞などに小中学生を招待する事業を始めました。また、ハーティーセンターの諸活動に中学生にも関わって頂くよう学校との連携を深めました。その

成果は徐々に出てきています。

さらに、2024年度から障がい者や外国人居住者などの利用促進に取り組み始めました。今日まで多文化共生の研修会などは実施してきており、施設利用申請書の英語版やポルトガル語版を整えてきていましたが、外国人居住者の利用促進をどのように図っていくのが具体化できていませんでした。この度の(公財)びわ湖芸術文化財団との「アートと地域のためのスモールトーク・プロジェクト」はその良いきっかけとなりました。愛荘町におけるテーマを「外国人住民の比率が高い愛荘町では、言語や文化、習慣の違いを越えて外国人や障害者、高齢者など多くの人々が使いやすいホールづくり」にして取り組むこととなりました。

カフェyakubaは、愛荘町役場秦荘支所の2階の空き部屋を活用するハーティーセンターの新たな挑戦です。いわゆる指定管理よりもさらに自由な活用が可能で、役場の中に異質な自由な交流スペースをつくることを目指しており、スモールトーク・プロジェクトの一環であるWGP(WORLD GAME PARK)もカフェyakubaで開催しました。



「ふしぎなモザイクタイルのワークショップ～造形ワークショップ～」にて、障害の有無に関わらずみんなでつくった作品(「スモールトーク・プロジェクト」以外の活動)



「ハーティーマンスリーコンサート」にて、ギターを弾くロバーツ(「スモールトーク・プロジェクト」以外の活動)

## 外国人住民の声から始まった、 地域文化ホールの多文化共生

「ホールツアー」  
開催日：2024年12月13日(金)  
17:00-20:00

柳田リーブス安代

(Office Reives / MEET BY CHANCE代表 / NPO法人コレジオ・サンタナ理事)



英語話者の外国人住民を集め実施したホールツアーの様子



ホールツアーでの意見を受け、一部の看板にふりがなが併記された

ハーティーセンター事務局長・林氏の「外国人住民の方にもホールを活用してほしい」という想いをきっかけに本プロジェクトは始まった。当初のプロジェクトメンバー候補は日本人のみであったが、当事者の声を反映させるため、愛荘町在住の外国人住民を加えることを提案し、アメリカ出身のジャクリンさんが参画した。

しかし、外国人住民と一括りにしても文化や言語は多様であり、一人の意見が総意にはなり得ない。そこで文化的ニーズを把握するため、英語話者を対象とした「ホールツアー」と、滋賀県内で在住人口の多いブラジル人を対象としたポルトガル語アンケートを実施した。

ホールツアーには5名(アメリカ3、ガーナ1、スロバキア1)が参加し、館内表示が漢字だけで分かりにくいこと、多言語での説明不足、調理室や和室への驚き、地域文化の展示を望む声などが挙がった。アンケートには106名(子ども18名、大人88名)が回答し、「日本の伝統文化」への関心が最多であったが、具体例を挙げられる人はおらず、接点の少なさが課題として浮かび上がった。

これらの声を受けて企画したのが「WORLD GAME PARK (WGP)」である。ホールツアーに参加したマシューさんの「ここでゲーム会をやってみたい」という声をきっかけに、外国人住民と日本人住民が交差する場づくりを目指した。ホールを家の居間の延長のように気軽に集える空間とし、ゲームを通じて自然な交流を促した。外国人住民

4名がナビゲーターとして参加し、「共につくる」という感覚が共有されていった。

現在は子どもからシニアまで毎回約15名が集い、多言語が飛び交う交流が生まれている。さらに音楽コンサートも開催し、地域在住の外国人住民と日本人住民、プロの音楽家が共演した。本事業を通じて、ゲームや音楽は年齢や言語の壁を越えて共に楽しみ、よりフラットな関係性を築きやすいことを実感した。

また、ハーティーセンターという地域ホールだからこそ継続的な開催が可能となり、交流は日常へと広がっている。参加者が毎回変わる中で、分かる人が分からない人に教え、初対面同士が自然に巻き込み合う場が生まれている。動き続けるこのWGPから、新たな多文化共生の可能性が生まれることを期待している。

ブラジル人住民の方への  
文化ホール利用に関するアンケート調査  
回答期間：2024年12月13日(金)～2025年2月23日(日)



回答結果は  
こちらの二次元コードを  
ご覧ください

# WORLD GAME PARK / 0歳～大人まで楽しもう!わくわくコンサート

谷 竜一

(詩人・演劇作家・芸術労働者、WORLD GAME PARKオブザーバー)



「WORLD GAME PARK」の様子

「WORLD GAME PARK」には毎月新しいゲームが持ち込まれ、日英バイリンガルでプレイされる。参加者の年齢や英語の習熟度も様々で、所々ルールがわからないこともあるが、「やってるうちにわかるから……」と、おもむろにプレイが始まる。

それにしても、世界にはなぜこんなに多くのゲームが存在するのだろう。さらに言えばここでは、参加者に合わせてルールの省略や追加もしばしば行われる。

スポーツにおいて中村敏雄\*1は、階級社会から平等主義への変遷をふまえ、市民は「多様性と不平等を根本的な前提とし」「ルールを守りつつルールを変えていくという(中略)矛盾への挑戦」を行ってきたとしている。

つまりルールは「そのゲームっぽさを守りつつ、そこにいる人が参加できるように」更新される。プレイするのは何

歳で、何語を話すのか? 何人で? どんな特性・性格? そして(ちょっと大袈裟だが)そういうプレイがなされる場には「誰が市民として想定されているか」が時に反映され、定着・更新されていく。

隣室の「わくわくコンサート」では日英の手遊び歌や、ブラジルにルーツを持つバンドのポルトガル語での演奏とトーク、ドイツ語、フランス語の歌曲やオペラ等、様々な言語の楽曲にふれられるよう工夫されていた。

時に素朴な、時に複雑な彩りの歌を聴きながら、私は今日集った世代もルーツも異なる観客それぞれが、どの歌に親しみを抱き、どの歌を新鮮に聞いたのか、思いを馳せた。そして、「〇〇の曲もやるよ!」と(〇〇に観客それぞれへの惹句を代入し)コーディネーターが声をかける様子を想像したりもした。



12月開催「WORLD GAME PARK Presents わくわくコンサート」

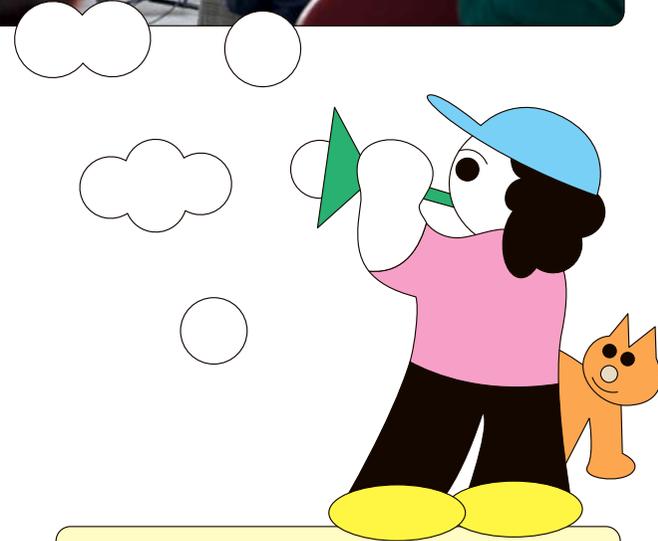


「WORLD GAME PARK」の様子

私は隣り合ったふたつの会が、さまざまな属性・特性の「あなた」の来場を個別具体的に想定し準備されていた点に好感を持った。実は、その準備は誘われた「あなた」をちょっと緊張させる。「英語わかるかな」「子どもと一緒にできるかな」「服これヘンかな」とか、「あなた」は逡巡する。いざ来場したら、「あなた」はととても歓迎されるので、少し気恥ずかしくて「あなた」はその経験を簡単に消費できない(この緊張の程度を調整するのがコーディネーターの仕事だ)。言葉は少しわからないが、それは課題から話題にかわる。

その心地よい緊張に、私は未来を少し夢見る。コンサートでのデュエットを思い返す。マーカスはプロと歌うことに、脇阪は英語でのデュエットに、それぞれちょっと緊張しつつ、微笑みあって歌う姿が美しかった。

\*1 中村敏雄『メンバーチェンジの思想』ルールはなぜ変わるか』1989年、平凡社



**「WORLD GAME PARK」**  
 開催日: 2025年6月7日(土)、7月5日(土)、8月2日(土)  
 9月13日(土)、10月18日(土)  
 11月8日(土)、12月6日(土)  
 2026年1月17日(土)、2月7日(土)、3月7日(土)  
 全日13:30-15:30  
 ファシリテーター: Matthew、Marcus、Dan、Nana

**WORLD GAME PARK Presents  
 わくわくコンサート**  
 開催日: 2025年12月6日(土) 13:00-14:30  
 出演: 脇阪法子、榎山さやか、JUNBOKU

P10、P11上 撮影: おおえちえ



## 地域とつくる文化事業のためのヒント

「アートと地域のためのスモールトーク・プロジェクト」に関わったみなさんに、地域やそこに暮らす人たちと「一緒につくる」アートプロジェクトを、長く続けていくために、日々心がけていることや工夫を教えてくださいました。



### 岩原勇気

2014年NPO法人BRAH=art.設立。障がい福祉事業の他、シェアハウス、カフェギャラリー、ゲストハウス経営。旧大津公会堂指定管理者。人・事・場をつなぐリンクワーカーとして活動している。

ブラフアートは障がい者の支援団体として「障がいがあるうとなかろうと好きなこと、得意なことを仕事にして精一杯生きる」をテーマに活動を続けてきた。

障がい者支援の場において、人は「表現(偶発的でも)を受け取ってもらえると、次の表現が生まれる」ということを学ぶ。「表現できる場があること」と「表現をそのまま受け取ること」は、自分自身を伝え、受け入れることにより、自己肯定感を育み、また、他者の考えを受けとめる土壌を作

る。公的な機関がアートを題材にして、広く県民がそれを楽しめるようにする根本的な理由についても同様の役割があると考えた。他者の表現に触れ、享受し、受け入れることの経験の繰り返しは、他者のあり方に寛容な県民性を育てることにつながる。また、アーティストの豊かな発想を自身に取り入れることは、柔軟な発想で、クリエイティブに未来を描く糧になる。

活動をつづける中で多様な人々の得意に出会い、それをサポートすることが、「障がいがあるうとなかろうと」を掲げる法人全体の仕事になってきた。まちの人たちとの協働を進める中で、それぞれの個性に気づき、得意と得意でつながりあえるよう取り組み自体をデザインしてきた。まちにたいする解像度を上げ、それを構成する人にフォーカスしたとき、社会全体がすでに彩に満ちていることがわかる。私たちが、それをうまくコーディネートすることができれば、社会はより面白くなる。そう思って活動を続けている。



### 長砂伸也

地域福祉、探究学習など地域にまつわるコーディネーター。湖南市石部で私設公民館mame Co-を設立・運営。社会教育士。立命館大学国際関係学部卒。

旧大津公会堂におけるプロジェクトを通して改めて感じたのは、「アート」は限られた人のものではない、ということである。スマートフォンで撮影した何気ない一枚の写真にも、その人なりの視点や感情が映し出されており、そこには確かにアートの要素が含まれている。写真鑑賞の場では、そうした表現を評価するのではなく、一人ひとりの感じ方に耳を傾ける雰囲気や自然と生まれ、穏やかで安心感のある時間となった。誰かの意見を否定せず、まずは受け取る姿勢を大切にすることが、対話の場を支える基盤になる

と感じている。

一方で、展示を実際に行う段階では、別の配慮も必要になる。今回の展示では、公募で集まった作品を「良し悪し」で評価しないことを意識したが、展示場所となる店舗にはそれぞれのルールや雰囲気、積み重ねてきたイメージがあり、作品との相性を考える必要があった。個人的に魅力を感じる作品であっても、空間に合わない場合があり、その判断には難しさが伴った。

また、公募という形式上、作品や作家の背景を深く知ることができなかった点も今回の特徴である。その結果、この企画は良くも悪くも「ライトな関係性」の中で成立していたと言える。すべてを深く理解し尽くさなくても関われる余白が、参加や協力のハードルを下げていた側面もあった。地域と人と一緒にプロジェクトを続けていくためには、関係性の深さを一律に求めるのではなく、その時々に応じた距離感や関わり方を受け入れる姿勢を持ち続けたいと考えている。



### 中川佑希

旧大津公会堂 勤務(受付・広報担当)をしながら電動車いすユーザーとして、学校での人権学習講演、障害福祉関係の研修講師、障害平等研修登録ファシリテーター、障害者ピアサポーターなど、多岐にわたる活動を行っている。

### 「こいするまちづくり」に飛び込んで：電動車いすユーザーの私が見つけた、大津の新しい魅力

私は大津に暮らして25年になります。正直、これまでは日々の生活や活動に追われ、まちづくりや地域の人々の営みについて深く知っているとはいえませんでした。そんな私に大きな気づきを与えてくれたのが、勤務先である旧大津公会堂が掲げる【こいするまちづくり】というスローガンでした。「どんな人が暮らし、どんな営みがあるのか。まずは『人を知る』ことで、このまちが見えてくるのではないか」そう考えた私は、公会堂を飛び出し、まちの人々へ直接聞き取りを始めました。お話を伺ったのは、公会堂のイメージや【あなたのおすすめスポット】【このまちの好きなところ】などです。

### 人々の声から見えてきた大津の魅力

「びわ湖や景色が好き」「人の温かさ」「住みやすさ」といった、大津への普遍的な愛着。公会堂について「昔はよく行った」「習い事といえば公会堂というイメージが強かった」という、歴史的な愛着。

「マルシェ、婚活イベント、映画などのイベントがあれば行きたい」という、新たな交流の場への期待。こうした声に応えるため、現在は公会堂内で、談話室【座】や本の交換所、服の交換所、アートの展覧会などを運営しています。さらに、立命館大学との共同でコミュニティアーカイブの手法を活用し、まちの人に焦点を当てたインタビューをInstagramやnoteで投稿したり、まち歩きイベントも行っています。

この活動を通して、私自身が一番大きく変わったのは、以前よりもずっと大津が好きになったことです。自分が人と出会い、知り、深く関わることで、まちの見え方が一変することを実感しています。これからもこの活動を続け、大津のまちの魅力を発掘し、人と人、人とまちを繋げていきたいと思っています。



### 若林朋子

「スモールトーク・プロジェクト」報告会に登壇。プロジェクト・コーディネーター。1999～2013年企業メセナ協議会で企業の文化芸術活動支援の環境整備に従事。現在はフリーランス。

撮影：安田有里 © Ko Na design

### つなぐ相手は「人」

「地域に暮らす人たちと一緒につくるアートプロジェクトは、コーディネートが何より大事」とはよく言われることである。コーディネートは「つなぐ」とか「橋渡し」、コーディネーターは「つなぎ手」などという。「アートマネジメントとは、芸術・文化と社会の橋渡しのこと」と表現されたりもするが、では、何をつなぎ、どこを橋渡しするのだろうか。芸術や文化をつなぐ先が地域とか社会だというと、案外ぼんやりしているのではないだろうか。社会は、解像度を上げていくと人の集合体である。であれば、つなぐのは「人」。あの

人に届けたい、あの人たちと企画したいと、橋渡ししたい誰かの顔を思い浮かべると、プロジェクトのイメージが一気に具体化する。

### 相手の土俵に立ってみる

地域には多様な方々が暮らしている。関心事も、悩みも、言葉遣いも千差万別である。そうしたなかで、地域に暮らす人たちと一緒にアートプロジェクトをつくらうとする際に、「アートはこんなことの役に立つ」「アートは社会の課題を解決する」と説明しても、多くの人にとっては、唐突で理解しがたいのではないかと思う。そこでアートを主語にして語る方法から、相手を主語にして考えてみると、自分が見えていなかった世界が見えてくる。アートの側に相手を引っ張り込もうとする前に、相手の土俵に立たせてもらう。まずは相手の事情をよく知ることから。アートで解決しようとする社会課題は、相手にとっても課題なのだろうか？相手の視点に立ってアートを見つめ直す時間もまた、得難い機会である。



## 林 定信

一般社団法人愛荘町文化協会事務局  
長。愛荘町などにおいて、埋蔵文化財  
の調査、文化財の保護、博物館の経営  
あるいは歴史的建造物の保存・活用な  
どに関わる。近年は集落活動や地域  
開発にも深く関わる。

### 当事者の声を聞く

長く付き合いのある外国人居住者でも、「そんなふうに考えるのか!?!」という習慣・文化の違いに驚くことも少なくありません。また、障がい者やその保護者の抱える問題はとにかく多様です。個々それぞれ全く異なります。偏見を排し、当事者の声に時間をかけて傾けるということを、多くの失敗や後悔を通じて学びました。

### 大抵のことは思い通りにはいかない

多様な人間が相手のことですし、想定外のことも起こり

ます。事業が計画どおりに進むことはまずありません。当初の入念な計画策定に時間をかけることも必要ですが、その実施過程でどのように適切に変更、調整していくかがむしろ大切です。臨機応変な対応には知識と経験さらには忍耐力が必要になってきます。

### 時間をかけた信頼関係

地域の方々とは長い付き合いになります。そして、この付き合いを通じて衝突をしながらも構築した信頼関係により協働できるようになります。表層的な連携では1+1=2以上の成果は生まれません。

### 火中の栗を拾う

地域の人からの難題については、強いて火中の栗を拾うことにより、信頼関係を築くこともでき、またそれまでの殻を破るきっかけとなります。



## 谷 竜一

詩人・演劇作家・芸術労働者。1984  
年福井県生。2021年から2025年8月  
まで京都芸術センタープログラムディレ  
クター。個人としても演劇作品やアート  
プロジェクトのディレクションやマネジメ  
ント等に広くかかわる。

撮影：石井飛鳥

### 目的のために、手段をえらぶ

これは、尊敬していた先輩から20年以上前に聞いた motto。この文章は、ふたつの意味に読み取れる。ひとつは「目的を達成するために、自分がすでに持っている手段や『こういうものだ』というセオリーに、拘泥しないで選択肢を探る」という意味。もうひとつは、「目的のために手段を選ばない」の反対、つまり、『目的を達成するためなら何をしてもよい』わけではなく、目的の達成と同等に、達成のための手段を

重視する」という意味。

とりわけ、特定の地域でプロジェクトを行うときは、自分がとりうる手段と同じかと同じかそれ以上に、その環境がどういう特性を持っているのかのリサーチと分析、位置づけが重要。その地域やそこに生きているひとは、プロジェクトの協働作業員だ。その協働作業員が欲することを（時には思ってもみないかたちで）叶えるために、協働作業員がどのような手段を取りうるかをよく知り、実際にどう進めるかを検討する。

そうして選ばれた手段や、手段が決まるまでの紆余曲折がユニークで、環境に適切であることが、プロジェクト全体に緊張感とユーモアを与え、結果としての作品や上演に特異性をもたらすと考えている。もちろんこのことは、協働作業員の意向や感覚を（完全にそれに従うわけではないにせよ）尊重することとも、密接につながっている。



## 柳田リーブス安代

Office Reives / MEET BY CHANCE  
代表 / NPO 法人コレジオ・サンタナ  
理事 / 愛荘町国際交流協会理事。ブラ  
ジル学校サンタナ学園の支援を中心  
に講演や国際交流・多文化共生事  
業に取り組む。

### 地域の人って誰のこと？

私にとっての「地域の人」とは、そのエリアに暮らすすべての国籍の人たちを指します。言語や文化が異なり、日本語が得意な人もいれば、まったく分からない人もいます。多様な人々が一人でも多く興味を持ち、参加できるプロジェクトとは何か。みんなが安心して心地よく楽しめるにはどうしたらいいのか。いつもその視点を大切にしています。

### 声を聴くことから始める

プロジェクトづくりでは、まず「声を聴く」ことから始めます。本当にその人たちが望んでいることなのか。私の思

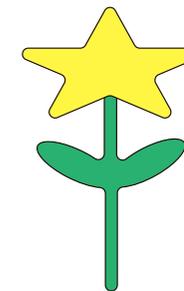
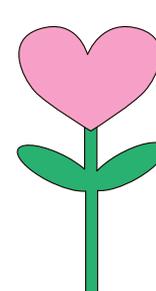
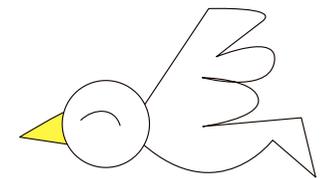
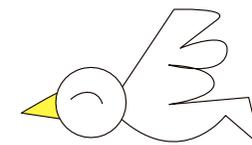
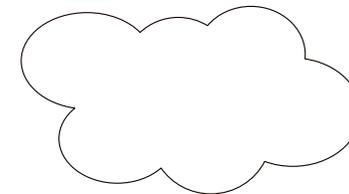
い込みで決めていないか。外国にルーツを持つ友人たちの声に耳を傾け、「言葉にならない思い」にも触れようと努めています。

### 一緒にいる時間を増やすこと

多様な人が集まる場では「違い」が目立ちますが、同じ時間を重ねていくと「共通点」も静かに浮かび上がります。食事を共にする時間や、絵画や音楽に感動する瞬間など、小さな対話や行動を積み重ねることが「違い」の壁を越える力になります。

### 一緒にやる手間を惜しまない

私はできるだけ外国人住民にも運営側として参加してもらうようにしています。言葉やルールの違いから手間がかかることもありますが、彼らは「ゲスト」ではなく「地域を共に作る仲間」です。企画当日だけの関係ではなく、終わった後も道端やスーパーで「こんにちわ!」と声を掛け合える関係を目指しています。





## 寄稿

スモールトーク・プロジェクトのアドバイザーとして携わる熊井一記さん、江藤慎介さんによる寄稿と、本プロジェクトのコラボレーターの池田佳穂さんが、滋賀県立大学地域共生センター特任講師・上田洋平さんと対談した記事を掲載。

## スモールトーク・プロジェクトから始まる“豊かな影法師”



熊井一記  
(くまい・かずのり)

撮影: Tomoko Hidaki

劇団四季を経て、KAAT 神奈川芸術劇場の開館準備に携わるなど公共劇場の現場で長年働く。2022年、関西に転居し、現在は神戸市民文化振興財団事業部長を務めるとともに、全国の創造型劇場のネットワーク「劇場、音楽堂等連絡協議会」の事務局長も務める。

人生は歩き回る影法師、  
あわれな役者だ、  
舞台の上でおおげさにみえをきっても  
出場が終われば消えてしまう。

—ウィリアム・シェイクスピア『マクベス』(小田島雄志訳/白水社)

劇場・文化ホールを拠点とし、地域とアートのつなぎ手人材、アートコーディネーターの活躍についてリサーチを行うプロジェクトがこの「アートと地域のためのスモールトーク・プロジェクト」ですが、私は「劇場」という言葉について考えるとき、真っ先に思い浮かぶのが、先ほど挙げたシェイクスピアの言葉です。

これは『マクベス』の終盤、滅亡間近の籠城戦の最中にマクベス夫人が死に(そうそう、マクベス夫人はこの作品で主役の1人であるにも関わらず名前が明らかにされない登場人物です)、最大の同志を失ったマクベスが絶望の間に墮ちていく中で独り言のように吐き出す台詞です。

この一見無関係なお芝居の言葉とスモールトーク・プロジェクトとがなぜ関係があるのかというと、それは「人生は歩き回る影法師」という一節。シェイクスピアが描いた「影法師」は人生の儚さを示す言葉ですが、私はその影が誰かに照らされることで豊かなものになる可能性を感じてい

ます。誰にとっても人生というものは、その人にとっては唯一の重大な出来事でもあるし、それと同時に誰かに目撃してもらって、つまり社会のなかで誰かと関わっていくことで満たされるものだからです。マクベスはその凄惨な暴力によってあわれな役者としての人生を終えますが、本来人生とは社会生活の中でどれだけ豊かな関わりを作れるかが重要になってくるのではないのでしょうか。人生が他者との関わりで豊かになるように、アートもまた地域との関係性の中で生き直す。私はそんな視点でこのプロジェクトを見えています。

地域に息づく人々が普段の生活から少し離れて、あるいは普段の生活の延長線上に、アートの力を作用させて「豊かな影法師」を作っていくこと。そしてそのお手伝いをする多様な地域人材がいること。今回のスモールトーク・プロジェクトは、劇場・文化ホールという舞台芸術の場(リソース)を鑑賞会場だけではなく活動の拠点として活用し、「豊かな影法師」を作っていく専門的な知見を持ったコーディネーター(専門人材)を育成していこうという試みです。いわば持続可能な生き活きとした地域社会を作るための実証実験なのだと思います。

2012年、通称「劇場法」(劇場、音楽堂等の活性化に関する法律)が制定され、それまで貸館利用を主目的とする上演施設とされていた劇場・文化ホールが、この法律によって、全ての地域住民に貢献する文化拠点、「公共財」であるべきと位置づけられました。具体的には、専門的な知見を持つ人材の配置が必要であるということと、地域コミュニティの創造と再生を支える「新しい広場」という考え方や、地域の多文化共生を含む国際的な交流を促進する「世界への窓」という考え方で、その活動の目指すところが示されています。

2024年12月、スモールトーク・プロジェクトの「クリスマスパーティー」(@びわ湖ホール研修室)に集まった皆さんは、本当に多彩なコーディネーターの方々でした。いわば「地域をつなぐ仕掛け人」としての活動を実践されている専門

人材の方々。パーティーでは年齢、障がいの有無、国籍や使う言語に関わらず誰でも参加できるアート活動が、滋賀県各地域の特色を活かしながら、楽しい工夫を積み重ねて展開されていることが発表されました。「新しい広場」「世界への窓」という劇場法の理念が、滋賀の地域の皆さんの手で丁寧にかたち作られていて、そこではスモールトーク・プロジェクトのスタッフも伴走支援役として参画していました。その後の皆さんの成果は、この報告書にも多数掲載されているとおりです。

全国の公立の劇場・文化ホールのネットワークである全国公立文化施設協会(全国公文協)では、いま「新しい広場」を日本各地に実現していくための調査研究事業「参加型事業プロジェクトチーム」が稼働しています。これはいわゆる鑑賞ニーズに応える公演事業だけではなく、住民

参加型のワークショップやアウトリーチ、インクルーシブフェスティバルなどの活動を普及させていくことで、劇場・文化ホールと地域との新しい関係を作っていこうという試みです。実は滋賀の「スモールトーク・プロジェクト」はこういった全国公文協の活動を先取りするものでもあるのです。

今後「アートと地域のためのスモールトーク・プロジェクト」の先進的な成果が、全国公文協などとも共有されて、滋賀県の豊かな文化資源を活かした活動や地域人材の活躍など、そのノウハウが日本中に広まっていくといいなと思います。

その先に「豊かな影法師」が自由自在に出現する世界があるのだとしたら、それはとても面白い未来です。滋賀の「スモールトーク」の実践が、各地域に「豊かな影法師」を生み出していくことを願っています。

## 文化施設を「みんなの場所」に取り戻すために — 文化的コモンズという視点



江藤慎介  
(えとう・しんすけ)

株式会社地域計画建築研究所 地域産業イノベーショングループ。国や地方自治体をはじめ、商工会議所や商店街等の地域組織、中小企業グループからの、地域振興と組織戦略に関わる相談や依頼を中心に、各種調査、計画策定、事業化支援等のプロジェクトに取り組む。文化政策や条例への立案に関わる事例多数。

### 1. 国が示す「次の文化施設像」

劇場、音楽堂等の活性化に関する法律、いわゆる「劇場法」が施行されてから10年が経過した。現在、文化庁の文化施設部会では、これからの文化施設の在り方について検討が進められている。議論の中心にあるのは、文化施設をハブとした「創造的循環」の形成であり、「地域のニーズに応じた活動の高度化」とともに、「誰一人取り残されない多様性・包摂性の向上」が掲げられている。

こうした方向性は、文化芸術推進基本計画(第2期)が掲げる、「心豊かで活力ある社会」の実現、そして「文化芸

術と経済の好循環」を支える文化拠点像とも重なっている。制度の上では、文化施設はすでに「次の役割」を期待されていると言えるだろう。

### 2. 文化施設の利用実態と、取り巻く厳しさ

文化芸術を鑑賞・活動する市民の割合は、決して高いとは言えない。国の「文化に関する世論調査」(令和6年度)によれば、文化芸術を鑑賞した国民は43.1%にとどまり、その割合は近年減少傾向にある。内容を見ると、約4割が映画であり、美術、音楽、演劇などはいずれも低い水準にある。

さらに、市町村単位で見た場合、公立文化施設の利用者はおおむね4割前後とされている。単純化すれば、「文化施設で鑑賞する人」4割と「文化施設を使う人」4割を掛け合わせ、身近な文化施設で鑑賞や活動をしている市民は、全体の2割弱にとどまる計算になる。

その一方で、文化施設の維持管理には多額の費用がかかる。ランニングコストは年間数億円に及ぶことも珍しくなく、60年間運営すれば100億円を超える場合もある。老朽化した施設を建て替えるとなれば、50億円から100億円規模の初期投資が必要となり、建設コストは年々上昇している。

結果として、現在の文化施設は、約2割の市民を主な利用者として、多額の税金によって支えられている構図が浮かび上がる。人口減少が進む中で自治体財政が厳しさ

を増すことを考えれば、「市民誰もが」文化芸術サービス  
を享受できる仕組みづくりは、避けて通れない課題である。

### 3. 文化的コモンズという考え方

こうした状況の中で、近年注目されているのが「文化的  
コモンズ」という考え方である。これは、一般財団法人地  
域創造による調査研究報告書『災後における地域の公立  
文化施設の役割に関する調査研究—文化的コモンズの  
形成に向けて—』(2014年)で示された概念で、「地域の  
共同体が共有・再生しうる文化資源の総体」や、「誰でも  
自由に参加できる共有空間・活動ネットワークとしての文  
化圏」と整理されている。

文化的コモンズは、特定の施設や主体だけで成立する  
ものではない。多様な施設、空間、人、活動が相互に関わり  
合うことで形づくられ、そのハブとして文化施設が位置  
づけられる。

では、「市民誰もがまちなかのどこでも文化芸術に出会  
える」とは、どういう状態だろうか。それは、文化施設で公  
演や展示を行うことや、貸館として利用してもらうことだけ  
を意味しない。まちの中で文化芸術に触れる機会を増やし  
たり、文化芸術を手段として、居場所や人と人とのつな  
がりを生み出す装置として文化施設を使ってもらうことも  
含まれる。

今回の「アートと地域のためのスモールトーク・プロジェ  
クト」では、大津市の旧大津公会堂や、愛荘町立ハーティ  
センター秦荘において、鑑賞や貸館とは異なる文化施設  
の使い方が模索された。文化施設をハブとした文化的コ  
モンズ形成に向けた、確かな第一歩だったと言えるだろう。

### 4. ロジックモデルで描く、これからの文化施設

文化的コモンズの形成に取り組むにあたり、ぜひ活用し  
たいのが「ロジックモデル」である。ロジックモデルとは、事  
業の目的から活動、成果(アウトプット)、最終的に目指す社  
会的変化(アウトカム)までを整理するための思考ツールだ。  
従来、文化施設の事業評価は、「何回実施したか」「何人  
が参加したか」「満足度はどうだったか」といった成果(ア  
ウトプット)指標に偏りがちだった。その結果、本来目指し  
ていた最終的な社会的変化(アウトカム)との関係が見え  
にくくなっていた。

文化施設をハブに、「市民誰もが」文化芸術サービス  
を享受できる状態を目指すのであれば、これまでとは異なる  
アウトカムが求められる。だからこそ、何を実現したいのか、  
そのために何を行うのかを事前に整理し、事後の振り返り  
にも活かせるロジックモデルは有効である。文化施設が「み  
んなの場所」へと変わっていくための、確かな道筋を描く  
手がかりになるはずだ。

本対談では、滋賀県立大学地域共生センター特任講  
師の上田洋平と、インディペンデントキュレーターの池田  
佳穂が「アートコーディネーター」という存在を手がかりに、  
アートと地域、学びと自由、そして滋賀という土地の可能  
性について語り合った。

池田は、インドネシアで学んだキュレーションの考え  
方を紹介する。そこでは、作品を展示すること以上に、「人や  
社会、コミュニティをどう巻き込むか」が重視される。キュ  
レーションの対象はモノに限らず、人や関係性、場そのも  
のに広がっているという。アートコーディネーターとは、必  
ずしも職業として名乗る存在だけでなく、日常の延長線  
上でアートと地域をつなぐ「橋渡し役」も含まれるのでは  
ないか。その役割を池田は「受粉」にたとえる。

これに上田は、アートコーディネーターをミツバチやチョ  
ウになぞらえる。彼らは受粉を目的にしているわけではなく、  
花に惹かれて動く中で、結果的に花粉を運ぶ存在だ。つま  
り、重要なのは「飛び回る存在」だけでなく、「花が咲く土  
壌」があることではないかという問いが浮かび上がる。

滋賀という土地について池田は、六斎念仏<sup>\*1</sup>など今も  
息づく深い地域文化や、地域ごとに異なる文化の重なり  
に魅力を感じていると語る。海外アーティストが琵琶湖に  
強い関心を示すという話も紹介される。上田は、滋賀が縄  
文時代から人が住み続け、古層と現代が重なり合う「重  
層的な地域」であることを指摘し、その可視性こそが滋賀  
の面白さだと応じる。

対談は、学びのあり方へと展開する。池田は、山中  
suplex<sup>\*2</sup>で行っているラーニングプログラムを例に、「教  
える／教えられる」という一方のエデュケーションではな  
く、参加者が主体となって学び合うラーニングの重要性を  
語る。これに対し上田は、アートには「アンラーニング」、つ  
まり学び捨て、学びほぐす側面があると指摘し、祭りの構  
造を例に挙げる。祭りはあえてコンフリクトが起こるように  
設計され、その都度「なぜ続けるのか」を問い直すことで  
更新されてきた文化だという。

さらに上田は、「じょうぶな頭とかしこい体」<sup>\*3</sup>という言葉  
を引きながら、まず身体で感じ、そこから解釈を交換するこ  
との重要性を語る。人類学者・岩田慶治のフィールドワ  
ーク論<sup>\*4</sup>を引用し、「共に自由になる」ことこそが学びやア  
ートの核心だと述べる。アートは共生社会のための手段で  
はなく、一人ひとりがより自由に生きるための営みであり、  
その結果として他者との関係がひらかれていくのだ。

後半では、「発表の場」や「文化施設」の役割が議論さ  
れる。上田は、公園や文化施設が本来は市民のコモンズ  
であり、使うだけでなく「関わりながら育てる場」であつた

はずだと語る。池田も、日本では場づくり(プレースメイキ  
ング)が先行しがちだが、共有地を育てる「コンプレイス」  
の視点が欠かせないと応じる。空間だけでなく、人と人の  
関係や時間を含めてデザインすることが重要だという点で、  
両者の認識は重なる。

話題はやがて、「エコトーン」という概念へと広がる。湖  
と陸のあいだ、自然と人間のあいだにある曖昧な領域。滋  
賀はそのエコトーンが非常に分かりやすい土地であり、里  
山や内湖、田んぼなど、人の営みと自然が交錯する場所  
が多く残っている。上田は、エコトーンは手入れと関わりを  
続けることで初めて多様性が保たれる場だと語り、コモン  
ズも同様に「守り続ける作業」が不可欠だと指摘する。

この複雑な関係性を説明する比喩として、二人は「鍋」  
や「おでん」を持ち出す。具材それぞれが持ち味を出し、  
出汁を吸い、火加減によって全体が整っていく。出汁はコ  
モンズ、火は資金、具材は多様な人や活動。投入のタイミ  
ングや順番を見極める「鍋奉行」的な役割こそ、アートコー  
ディネーターなのではないか—そんなイメージが共有される。

終盤、上田は「湖は曖昧である」<sup>\*5</sup>という言葉を引き、  
曖昧さを抱え込む滋賀というフィールドの価値を語る。多  
様な人が混ざり合い、せめぎ合いながらも「ここで生きて  
いける」と感じられる風景をつくること。それが地域づく  
りであり、アートの役割でもある。池田もまた、滋賀の環  
境や文化の多様性をどう伝え、どう可視化していくかが今  
後の課題だと応じ、対談は静かに締めくくられた。

## 上田洋平・池田佳穂による対談

# アートコーディネーターとは何者か —受粉し、混ざり合い、自由をひらく存在



上田洋平  
(うへだ・ようへい)

滋賀県立大学地域共生センター特任講師。専門は地域  
文化学、地域学。風土に根ざした暮らしと文化に関する研  
究と実践に取り組む一方、地域づくりを担う人材の育成  
や地域と連携した「共育プログラム」の開発・運営に従事。  
滋賀県文化審議会委員。滋賀県文化を活用した地域交  
流創出事業専門評価員。



池田佳穂  
(いけだ・かほ)

インディペンデントキュレーター。ラーニングと展覧会を水  
平的に捉えた企画を、国内外でキュレーションする。山中  
suplexの共同プログラムディレクター(2023-)および、ア  
ートセンターBUG(2023-)、「神戸六甲ミーツ・アート  
2024」のゲストキュレーターを務める。国際芸術センター  
青森[ACAC]公募AIR2025ゲスト審査員。

\*1 滋賀県高島市朽木古屋で伝承される民俗芸能で、太鼓・鉦・笛の音に合わせ念仏を  
唱え踊るお盆の供養行事。鯖街道を通じて伝わり、県の選択無形民俗文化財に選定。

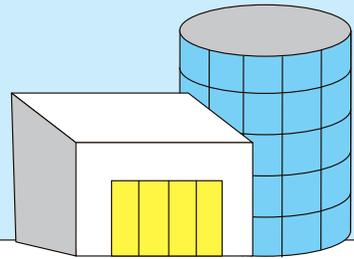
\*2 2014年に滋賀県大津市山中町に立地する現代アートの共同スタジオ/コレクティブ。  
制作スペースや設備を共有しながら、展覧会・ワークショップ・シェアミーティングな  
ど多様な企画を実施し、作家活動の持続可能性やネットワーク形成を促進している。

\*3 五味太郎『じょうぶな頭とかしこい体になるために』2006年、プロンズ新社

\*4 岩田慶治『創造人類学入門』『小学館創造選書57』1982年、小学館

\*5 池澤夏樹『うつくしい列島』『琵琶湖』2018年、河出書房新社





令和6・7年度

## アートと地域のためのスモールトーク・プロジェクト 報告書

発行：2026年3月31日

主催：公益財団法人びわ湖芸術文化財団

協力：NPO 法人 BRAH=art. (旧大津公会堂指定管理者)

一般社団法人愛荘町文化協会 (愛荘町立ハーティーセンター秦荘指定管理者)

Office Reives

発行元：公益財団法人びわ湖芸術文化財団

地域創造部 (滋賀県大津市打出浜15-1 TEL 077-523-7146)

ディレクション：池田佳穂 (インディペンデントキュレーター)

デザイン：清水真実 (direction Q)

イラストレーション：楢崎萌々恵



公益財団法人びわ湖芸術文化財団 地域創造部は、  
2026年4月よりびわ湖芸術文化交流センター  
(Biwako Arts & Communication Center)  
通称“BiWACC(ビワック)”として活動します。

